

- ◇開催日時 平成 29 年 7 月 30 日（日）10 時～12 時
- ◇会場 奈良県立万葉文化館
- ◇参加者 井上さやか（万葉文化館）、石原伸浩（奈良市立富雄第三小中学校）
松浦慎（奈良市教育委員会）、北村恭康（御所市教育委員）
篠原嶺（生駒市立光明中学校）、中澤哲也（平群町立平群北小学校）
新宮済・石原宏一郎（奈良市立平城小学校）、中澤静男（奈良教育大学） 9 名

◇内容

1. 県立万葉文化館が実施している万葉ことば遊びの紹介（井上）

①不思議な文字

言葉の意味や文法からではなく、おもしろさからアプローチする

二八十一不在国（にくくあらなくに）

九九：八十一 法興寺の建築と共に九九
が大陸から伝わっていた
のだろう

山上復有山：山の上にまた山有り → 漢字で書くと「出」：イデ

②万葉集って、な～に

- ・リズムにふれる。

5・7・5・7・7のリズムになるように言葉を組み合わせられてつくられた歌がたくさんある。

：和歌 声に出して読もう。

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見興 良人四来三

（よきひとの よしとよくみて よしといいし よしのよくみよ よきひとよくみつ）

- ・象形文字から漢字をつくってみよう
- ・字源表をもとに暗号をつくってみよう
- ・マンガで楽しむ万葉集

2. 石原先生の単元計画の検討（添付資料参照）6年生

「未来に伝えたい「いま」～いにしへから学ぶ～」

- ・万葉集の内容理解から進めていくのは、6年生児童にとって難しいが、万葉集に使われている文法に注目すると、現在に伝わっているものがあることに気づく。→ 序詞（じよことば）
- ・序詞に着目し、昔の人も感じることは同じであり、今も同じことを人はしているという捉え。
- ・6年生の3学期の卒業に向けた取り組みの一環として、「卒業」にむけての6年1組の思い出を一人一人が詩で残すという実践を展開する中で、万葉集を学習材として授業化する。
- ・万葉集を学習材とする良さ
万葉集はもともと万世まで伝えられるべき歌集として編まれたものであり、児童の学習との接点がある。



リズムを感じやすい。

序詞など修辞技法を含んだ歌が多くある。それらを手掛かりに、表現方法を豊かにできる。

万葉集には前置き、反歌－応答歌など、多様なバージョンがある。

- ・物語を5・7・・・に、逆にまず5・7・・・で書いてから、作文にするという方法もある。
- ・教師自らがモデルをつくることで、難しさや指導のポイントが見えてくるので、モデルづくりに取り組んでほしい。そのような先生の「熱意」は子どもを圧倒していく。
- ・万葉集は歌垣から始まったという説もある。日常会話では言えないことも、歌にすれば言えるというのは、日本だけでなく東アジア特有の文化的表現である。

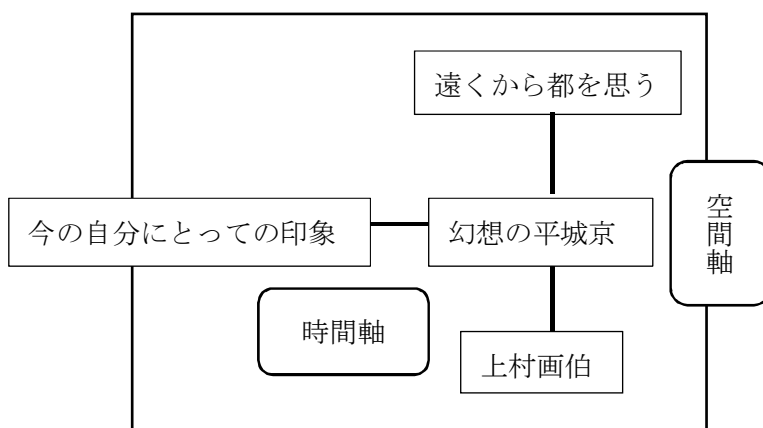
2. 新宮先生の単元計画の検討

「その名もゆかし わが平城」3年生総合的な学習の時間

平城小学校の校歌にある「ゆかし」という言葉に着目する

- ・校区にある「ゆかし」を探しに行く。→ 佐紀盾並古墳群・五社神古墳
- ・平城宮跡：校区の「ゆかし」の一つであるとともに、人類共通の宝物である世界遺産の一つに認められている場所。
- ・平城宮の時代の雰囲気や万葉集から感じ取る。
「あをによし 奈良の都は 咲く花の にほうがごとく 今盛りなり」

- ・ゆかしレポートを作成しよう
- ・万葉集には奈良の都のことを取り上げた歌が51首あり、そのうちの23首は、遠くから都を思う内容である。
- ・万葉集を通して当時の生活を想像する
- ・万葉集の中に表現されている「ゆかし」は、「心ひかれる」という意味である。



3. 篠原先生の単元構想

万葉集にある心情表現を鑑賞することを通して、表現力を鍛えたい。

- ・5・7・5～の歌作り → 万葉集にある心情表現の鑑賞 → 歌を創ってみよう

4. 中澤哲先生の単元構想

- ・映画「君の名は」を導入に、万葉集に取り組みないか。
- ・たそがれは「誰そ彼」である。
- ・映画の「たそがれ」を扱った授業中のシーンの板書は万葉集である。
- ・万葉集の時代、名前をあかすことは、婚姻関係を受け入れるという意味もあった。
- ・「君の名は」というのは、単に名前を聞いているのではない。求愛行動ととらえるべきだ。
- ・映画は多くの子どもが見ているので、それが万葉集につながることは、児童生徒の驚きをさそい、万葉集をもっと知りたい、という意欲につながるのではないか。
- ・その他、奈良の昔話や方言を取り入れた授業を構想している。